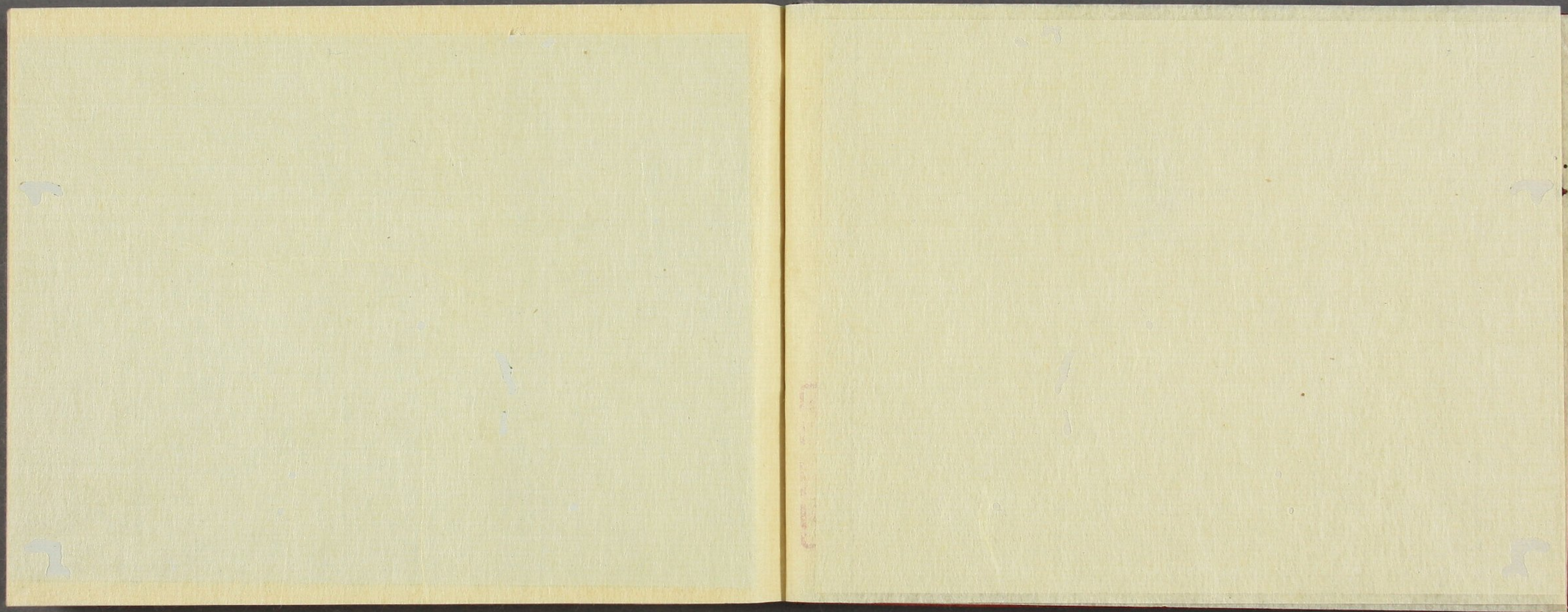


雨至





東屋

以牙并詞為卷名

所としの薄を志けらぬ東屋の
あかり程少くも北のまき

東屋 四行

私案アツクハ重屋トアリ

アツクハタル屋ノ心ニ有方乃

底ニ角木カケ棟木ノ下

より昔下ノ一ノとある

下ノ三ノ帯ハ屋乃トス

破風乃所ち記也
蓋北五方の八月より九月
までの事あり

ほく^清くはるるをいふは
しくはるるをいふは
もし入るはるるきりなり
筑波山の常陸國あり
東を君の常陸お司乃
かむすも也仍くなり
とふはけりまなり
は君八家の出むすもされ
とも品今乃人まきなる
乃受領の女とゆふは

あはれと云ふははたし
給ふんともくく
きと名惟一 給ふ蓋ふ
心也

ゆりもふふふふふふ
母君の心也

はたしはたし

東屋君母の心也
はたしはたし

太守者為親王置之親王

任はれ不知吏務仍以外
為守乃令勅吏務也
此故今の女と云ふも
也又苗玉守凡人任之
は止大字守は任はる
例もあはれ也

常陸守乃子花介也
兼源少納言兼續改書
妻 以上右版 花介右近将監
童女将妻 以上中右版

ふいなくちりにならる

前版也

いぢ君とつけて

祇は娘君とつゝ人びを

よ女乃乃妻とらるるにけ

常陸女娘君とる川

きしつと云んん女

浮舟と付くとき心欲

こと人と思つてさる

常陸の浮舟をも他人

乃とく思ふしきも也

うねり母君もあつて

しくとく思ふも出来

多也

ねるごとおつてさるも

おろしとく也

さほくさくさるり

源少納言讃岐守の

妻の成らる也

いまはさるし女君

我いし君し母君の我娘
君也拙若娘君ト云統
アリち乃女れ娘君と付
しる人ちるく一とアリ
此統めり

あつしひとしははらちうきんか
弄ちしんひのひのひ
孫れ人し
さくらちうきんか
富るある人とりあ也

ふとにけうしる統より
凡流を好也
知もくしる好くし 殆也

多ししるわうしん
下 迂 孝経序 ちうきんか也

うけぬしん
豪家 位しるく威勢
あつあつ也田舎人のさ
は也

すれまふさいん 通屈は

くはらふにせむるはとて
字たあはまおしりほし
争合お終合也 庚申と
ちるるやいかにんん但
拾遺集あると詞中にてえ
しり

右近女お 先祖不繼

お好さるし人の子也

きしりきしり 毎まあし

しんまもあつるおはしにふ

まももあつるお

まももあつるお

家申もあつるお

まももあつるお

まももあつるお

まももあつるお

まももあつるお

まももあつるお

まももあつるお

まももあつるお

乃い娘君とみうきと
けびるるよきしつれり
うつれらる也
^閑るをとりさく人
おもさぬかきさく人
つりさしつれり
君の神也
私る色び眼力を介
見神ちうくも
なうきくさく

楽人舞姫ちとあは也
るりうるのくはもの
早き曲ノ物也
ちとおうし 師と弟子
と日学する也
あこしとし 吾子也
子はしほあとうい
ととうし
我んしとらよ 母君也
陰の早しつれり

我らひらりもつゝ也
おのゝいぢりもつゝ也
浮舟乃父のおもひあはれ
うらあゝあゝあゝあゝ
朝夕よひぬきもつゝ也
よつけておのゝいぢりも
をねまよおほいし事也
あゝんもつゝ也おのゝいぢり
おのゝいぢりもつゝ也
おのゝいぢりもつゝ也

ついでにまを具しつゝ也
おのゝいぢりもつゝ也
又おのゝいぢりもつゝ也
妹もつゝ也
おのゝいぢりもつゝ也
おのゝいぢりもつゝ也
おのゝいぢりもつゝ也
おのゝいぢりもつゝ也
おのゝいぢりもつゝ也
おのゝいぢりもつゝ也

よあしひよ

サねれ詞也

女ももろしききりりりり

あろたの女ももろり

ころ奴と陳しころ奴媒

ろ識るる情也

中よりつくむす免

むすろの中は秘苑す

とまこてろるゆと也

よりのおもももろし

継子あよあろしよとん

さあしと也

君いよあろもろりりり

し

吾典しころるるるる

ころるる吾典しころる

ゆ也は系了れにサねろ

利願よ公ろあろりりり

わろるるあよとろり

はろるるあろりりりり

受領乃むいこよちりて
つよむむは外園の
らぬまもわも也
きやういもむも
くは父母くく常
陸うむすちもえむ
ぬんと也
ちあもれくく
馳走してあむに
もくく

おろし

つひとて人いむ
論と常陸
くくわく人
ちくく
源中納さあ
はる人前版のむ
またも
年いもくも
おほいひつむ

中よあつらひちむしむしめ
と

畜服乃中よあつら也将
監と音との申よあつ
ら也

私は調りしむしむし
君とらけし又君姫君
なとつらちむすち
あるともつらむすち
されむしむし

今引く人なり也
ともむすち志の實字に
ありと

むしめ ちれ也
ぬとつらむしむし調
もはむすちも 出也
いこのむし

伊勢お鏡目も也
むしむし 不都合なる
好むと人なり

あつしんしん 坂世さ
らるんすくさくはと
ふふくくくくくく
てささ

ちんしんしんしんしん
すちんしんしんしん
よりんちんしんしん
ちんしんしんしんしん
西谷の浮世はさか

ちん方(ちん)しん
ちんしんしんしん
ちんしんしんしん
ちんしんしんしん

妹女しんしん

ちんしんしんしんしん
ちんしんしんしんしん
ちんしんしんしんしん
ちんしんしんしんしん

ちよびおひくまうくは
さほちよびの媒さるる
まじらわうりか
ういづるちよび
折^園交る中さらば
年一もいれり
と
云は

私に同申れんはちよび
よおひくまうくは
とこひひのちよび
と

おはひくまうくは
よおひくまうくは
ちよび
と

ちよび

内方のちよび

ちよび

ちよび

ちよび

ちよび

ちよび

いぢねばさるるううら
まゝのちうしありてな
ほしあよき陰みあ
うういあなるといふ
よあまのつしちういふよ
うもしれすしほが納
え瀆改ちるまよありも
教ちうてたうしあ
おしうしんじに然つ
よしうしんじに然つ

きんねつる 堪ねつる
まゝのちうしあありて
根本の教のまゝに
よしうしんじに然つ
結んぬ

浮年乃る也
よしうしんじに然つ
男女子まおほいふ
よしうしんじに然つ
いぢねばさるる也

ふととくは 浮舟也
ふふふふふふふふ

ふふふふふふふふ

ふふふふふふふふ

ふふふふふふふふ

ふふふふふふふふ

ふふふふふふふふ

ふふふふふふふふ

ふふ

ふふふふふふふふ

母方乃あふふふ

ふふふふふふふふ

媒乃ふふ

ふふふふふふふふ

ふふふふふふふふ

ふふふふふふふふ

ふふふふふふふふ

ふふふふふふふふ

ふふふふふふふふ

ふふふふふふふふ

廻すなり

すさくくあまひも
実ちちる人より内流
きよき

またらたおほむさく
いまたはかた勢ちる
かうちぬも
人のさきさきひれありける
おね乃人うい尋常の
人の留結ちるよりは

またらぬ

いふにふさくは
今度の知人はと物
ありしと也あも
皆妹乃虚言るより
いふはさく

いふはさく
いふはさく
いふはさく

あつた人のさき

よきことばなり
おもしろ

のうもあまの 女おもしろ
この世のちかきもの
守乃詞也まじり
おもしろくとも返る
おもしろあまの
あまのあまの
不足とも
きこくあり

不堪の公也

おもしろい
はじり
おもしろ
新女を
おもしろ
おもしろ
おもしろ
おもしろ
おもしろ

眠
女ねとをみよとく
あけらるゝあくたを
とよ常陸外舞の
あはは之片よちん贖
常ももるびとを
さねといよく女ね立身
あまのくちあは知也
りし幸とちんさいと志
らあまのまゝに
しんたよちんさる

うまよあまのこ
系
幸とも何ともあま
わらもちん地事也信也
よちんくちん
妹のいよと信
あまのこよ居る妹
妹也
あまのこよ早し
妹乃ちうて女ね
也

大長よりしんくからん
贖方 古託指大納言
年獻贖方申書に
贖鋼ト云おろしる也
金銀をとりて官に
あつる也 是期に
おほし

きんをいひて
お乃詞し母乃ら
いふおほし物きん

し引く媒はしつら
あいつとあまし
あつていひて
此じすあ今もつるれ
とおろしすも
あつてあつて
申さし申一乃婦を
浮あつておつて
あつて
月ころいまたあ

はる

ちねよの ちねよ

かしのちねよのちねよ
おもしろい

守の子かへんちねよ

かへんちねよのちねよ

と

またちねよのちねよ

ちねよのちねよのちねよ

ちねよのちねよのちねよ

ちねよのちねよのちねよ

ちねよのちねよ

ちねよのちねよのちねよ

ちねよ

ちねよのちねよのちねよ

ちねよのちねよのちねよ

ちねよのちねよのちねよ

ちねよのちねよ

ちねよのちねよ

ちねよのちねよ

あこはげきり人 あこは
守乃我娘と云うけさ
う人の懸想人ん我人
乃がねと我娘の物う
てりり

かこくおもしりくさしり
母水^{わか}芳とおこりりり
ほつきまらちりりねん
地およそつんとせぬ
之れおとよはくおちり

と我はよちりねん
お

あちりく 吾奥を
お

お
お

お
お
お
お
お

いづれも我らもよき世に
あゆみゆくはふとては
命ももつらんを
のれりよ神の御心
うよらうも自己の朝
わくのよき世に我ら
らくらくの世に
わくわくもあつらん
あつらんもあつらん
そのいづれも

うねん

わくわくもあつらん
わくわくもあつらん
わくわくもあつらん
わくわくもあつらん
わくわくもあつらん
わくわくもあつらん

あつらんもあつらん
あつらんもあつらん
あつらんもあつらん

あつらんもあつらん
あつらんもあつらん
あつらんもあつらん

いづれこころあはれ

他ふよみくはるゝとら

あまゝにと腹立のあは

まゝとくも

ちねよみとくまゝとら

きりも

右のおほゝとくまゝとら

そとくまゝ

ちのたよみの夕音し梅葉

大納まゝとくまゝとら

つと蜻蛉まゝとくまゝ

きりのおとら

つとまゝとくまゝとら

女に音まゝとくまゝとら

まゝとくまゝとら

まゝとくまゝ

まゝとくまゝとら 中君も

まゝとくまゝとら

まゝとく

まゝとくまゝとら

母北方より上りて
と也八重と常陸女と
思ひくくくく
よよよよよ
常陸女也

折ふらんらん
今度女おのり
わくわく
うららら
公やと地をよる所

あゝあゝ
人々々々
わんわん
わんわん
あゝあゝ
うららら
うららら
うららら
うららら

あつらひしつゝ

あつらひしつゝ

方々西方なる

とらふ

まじり

らひ

と

あつらひしつゝ

と

あつらひしつゝ

あつらひしつゝ

あつらひしつゝ

あつらひしつゝ

あつらひしつゝ

あつらひしつゝ

あつらひしつゝ

あつらひしつゝ

あつらひしつゝ

あつらひしつゝ

あつらひしつゝ

つ積れ物をあつたりやう
定りきつるも紙には
なれそよふと本もんえ
てむさよふくもむさ
つ積の料生おるむさ
也おるらよふりけむ
あつむらよふらむら
て豊くとまらちあむ
万ふよあむらむら

あしこむらたおるしよのり

抄帝陸公の女に程浮
あめの舟おとまを不程也
人乃品んはらうむらむ
ち乃綱の人のあんに母
方也

こつらにのちあつり
あつむらむらむら
あつむらむら
あつむらむら
あつむらむら

ちう調也いせねとけね
方だともさかふりねあとも
是ひるふつれさすねと
あまららよ帝降の舞
いもさしあしるさあめ
と降あともちしむすねと
らともあつ外ね家
らんとねいあさふ
おんいあまもりね人
あねいあまの舞あま

あのおねえいあまね
らともあしあまもり中
きしらにさしあまの
ねともあまこのあま

あねも中さあまい
いひあまあまいあま
いあま

あねもいあま
あまいあま

あまいあま
常陸北方

乃中君よしりしもの

の詞)

所入なきまじき 方よるに
まじりしものふよるまじき
母方よるにまじりしものは
うらまはしきまじりし
うらまはしきまじりし
まじりし中君よるまじりし
—也

二言のまじりし 父のま

此條 容ろるる也

みくろまじりしあまは
父のまじりしあまは
まじりしあまは
まじりしあまは
父のまじりしあまは
あまはまじりしあまは
あまはまじりしあまは
あまはまじりしあまは
あまはまじりしあまは

何れもすゝめしき
まゝにあらはせし
ついでに
ふらふらふとあつた
母なる也
まゝにあらはせし
まゝなる也
まゝにあらはせし
出立もまゝに居おる
—まゝにまゝにまゝに

乃惟也

こゝろこゝろ 俄ち
いそいそとまゝに
任じまゝに
かゝるまゝに
物たるまゝに
こゝろこゝろとまゝに
あつたまゝに
まゝにまゝに
まゝにまゝに
まゝにまゝに

ほつと早や故に申るに
あなつちにまかりむら
あつと

年ころくはつちうりね

年事らとく

あつと

申る申る

あつと

申る申るのち申る

君とら

人とも申る

あつと申る申る

あつと申る申る

あつと申る

母方二三日申る

あつと申る

あつと

あつと申る申る

あつと申る

あつと申る

家司に抄紙を啓す
とありや

我浦子乃志きふれう
常陸守、前版乃子古後
苑人式戸懸し

いふる人への口はなし
白紙ふあしうし物中
えのりこ

ききふしむらうしんも
わたりしうしんも

人よと経あしう
らりしむしんも
今おもて年よしん
まはるむらうしんも
さしむしんも
白紙と申君と御合
こふむらうしんも
たふらうしんも
るむらうしんも

受領乃事びと也

うらむしやうとむらう

うらむしやうとむらう

うらむしやうとむらう

と也

らあしよ 常陸のすけ

とむらうとむらう

たうとむらうとむらう 小方

のひらう腹あつた

うらむしやうとむらう

うらむしやうとむらう

あつたうらむしやう

と也

まさのうらむしやう 明石中

うらむしやうとむらう

うらむしやうとむらう 伊勢

あつたうらむしやう

うらむしやうとむらう

と也

うらむしやうとむらう

小山抄云外衛佐亦任意
不常之至于近束次将
常劔上殿至妨仍宿
侍之は副於宿也持上
自余不能持上

あふこふひもが
中君よとあぬ女房達
乃とく也

かけらあもの
いまた成長をばく也

まほさりれく也

らふいよおほんあさうの
うはああさうよあは
すまらくも

まほさりれく也

あふこふひもが
まほさりれく也

自このふもが也二也

あふこふひもが
申君あふもが也

こころあはれきりし一節の
母の詞こころに申すの
母を也

何の山かこころに
如宿世いりし地故に
治まらぬるうに
ひてを治すとも
おしつそきを治す
山かこころに
り

こころを 大君

世中かうりく

申す詞こころを
乃るるる

こころを

母君死去乃るこころは
申す誕生は乃るこころ
好まらぬれをこころを
れいあるこころを
分りあるこころを

乃死去一切に付え
と大なる死去に
たはしむる事也

大將乃 意の心と申
れり始

大ねものこ 常陸
方 詞

ちとこのるを
こある事大なる
う 始りよ

わうとて 一棟の物
然もおもふ事
もあら ちと
みとてぬよつて
もあら

面白詞に何とて
ぬよりをこのる
こある事
ちとて
ちとて

好言はしるゝ へまゝ

あまのりしるゝのしらぬ
ひはまきけちるゝ
も今こく木をよら
るゝふしるゝちかく
さむとせ

うらむふたあふたのり
常陸よあふたの浮
崎乃事んちるゝこれ
い奥州のちるゝちるゝ

はし事ちるゝちるゝ
い垣寛あふたのり
ちるゝのちるゝ浮城の
ちるゝあふたのり
ちるゝあふたのり
いのある世とちるゝ
ちるゝあふたのり

世中は昔よりあふたのり
我身はちるゝあふたのり
大方は我身はちるゝあふたのり

あることばをいふに
我身つとていふに
はくことばをいふに
かゝるにありていふに
受領方すよちりていふ
身はつとていふに
これにいはは後世に
我身つとていふに
さかすまにいふに
いふことばをいふに

物をつとていふに
ことばをいふに
ことばをいふに
ことばをいふに
ことばをいふに
ことばをいふに
ことばをいふに
ことばをいふに
ことばをいふに
ことばをいふに

浮舟の舟

舟の舟

大将の舟

舟也

あまの舟

舟

自らの舟

舟の舟

舟の舟

舟の舟

舟の舟

舟の舟

舟の舟

舟の舟

舟の舟

舟の舟

舟の舟

舟の舟

舟の舟

舟の舟

かゝる御書は
よき御書

おぼしめし
大君乃御書
御書
すはあ
とあ

そむ
う
き前表

山
—
との物
と
は

ぬ
御書
と
ぬ
は

とよふつとよふつとよふつ
つてはつとよふつとよふつ
これとつとよふつとよふつ
とよふつとよふつとよふつ

これとつとよふつとよふつ
とよふつとよふつとよふつ
つてはつとよふつとよふつ
これとつとよふつとよふつ
とよふつとよふつとよふつ

とよふつとよふつとよふつ

人^{カタシ}人のつとよふつとよふつ
人^{カタシ}人のつとよふつとよふつ
つてはつとよふつとよふつ
これとつとよふつとよふつ
とよふつとよふつとよふつ
つてはつとよふつとよふつ
これとつとよふつとよふつ
とよふつとよふつとよふつ

花うりて中世の事
わらわらわらわらわらわら
はらわらわらわらわらわら
てまてらねんてまてら
のうらな。中世の事
あのみよふたあめし
くもぬんも

うらにまらな
唯今ふも
うけらららららららら

蓋はけ死年
まらしうれまら
ぬんも

いとうし
まらぬんも
らひまら

ゆめと花うり
不意也
あふ

あふ
まらあまた

きんも所々 面白く
しり

えいよと記し人

東玉人

かた

かた

う

か

わくとあも 若有人向

是業王菩薩

能随喜讚善者是人
現世口中常^出出青蓮
華香身毛孔中常
出半頭旃檀之香
法華 經 業

佛

面白事

よる

乃る

佛の

と也 定家の中行れ
とりやう毎夜も也
君はよのしや 中も也
母もよの娘也
けよき、今の

大物は女二字と具と
らねしやいふこと
わくさうも也
かろよふもいふこと
居るもいふこと

—も也

さうしやいふこと
もいふこと
あつたらういふこと
いふこと
教るあつたしやいふこと
人さういふこと、袖も
きふこと

言早ともに嬖妬なる
故長夜の闇もいふこと

常陸守の御書

常陸守の御書

常陸守の御書

常陸守の御書

常陸守の御書

常陸守の御書

常陸守の御書

常陸守の御書

常陸守の御書

常陸守の御書

常陸守の御書

常陸守の御書

常陸守の御書

常陸守の御書

常陸守の御書

常陸守の御書

常陸守の御書

常陸守の御書

常陸守の御書

常陸守の御書

小方車也

くろくちまの車にさかん
出前なるもすくぬく思ひ
てるより一糸内乃ほい
毛車なるより一例なり
ハ細代車なるもさかん
おれ乃車なり 白糸も同
ぬり也蓋ぬる公にあり
ぬりよとらなり也
むくりなり 一 おうりなり

云はしおぬり一也

ひららの車副乃逆
着也

とらぬりなり

白糸のしらぬ緒に取とこ

とらぬりなり

けしよらぬりなり

お方心中續方と見也

きしよらぬりなり

くろくちまの車にさかん

とあるあはれな

えびのちのちのち

東うひまのちのち

人のうのちのち

おと田舎のちのち

作らうのちのち

ゆき

大橋のちのち 中島の京女

ちのちのちのち

ちのちのちのち

ちのちのちのち

ありのちのちのち

ちのち

ちのちのちのち

ちのちのちのち

ちのちのちのち

ちのちのちのち

ちのちのちのち

ちのち

ちのちのちのち

白きあめいしちるま

右の太いもの 夕暮れの子

は花すらすらとさくらん

は俗すもや 髪をあら

いぬ

らいたれとてい

白きあめいしちるま

一筋

けいふあめいしちるま

大橋ちるま 朝

九十月のいしちるま

髪はあめいしちるま

りびんあめいしちるま

五九月のいしちるま

月とあめいしちるま

うしあめいしちるま

浮舟あめいしちるま

いしちるま 白きあめ

うしあめいしちるま

あめいしちるま

一尺二寸五分

引乃きく也

をいもあひて 屏風乃き

はなはたしきものなり

口乃きく也

たしきものなり

中乃きく也

のいもあひて

是也

乃きくはのいもあひて

白宮乃きく也

一也

きくはのいもあひて

乃きくはのいもあひて

一也

乃きくはのいもあひて

乃きくはのいもあひて

乃きくはのいもあひて

乃きくはのいもあひて

乃きくはのいもあひて

中よりあつたすより今
こころを結ぶもよみ
ええくくしひくは
はがらもちるも
しむはらうくうよ
こころ
屏門袋のり今せま
つくちま
かく人のせしめ
帝よこはるも

浮舟をすすむを
て道具びらき
右近より 大輔の女中
君の女房也
こころ
みり
まは
おろし
女房

信乃乃おつてはまじり

おとねおつて

うよよおつておつておつて

おつておつておつておつて

おつて

おつておつておつて 弄 寝殿

あまひおつて女房の方へ

おつておつておつておつて

園 上座中おつておつておつて

おつておつておつておつて

おつてに内へおつて

おつておつておつておつて

おつておつておつておつて

おつておつておつておつて

おつておつておつておつて

おつておつておつておつて

おつておつておつておつて

おつて

おつておつておつておつて

おつておつて

少ね 又たを傍輩也
かろふいありの 白文浮母
乃こころ入おしし折
かろねも自文のこころ
る折折とたしつる
ねよひり
こつあつてはる 白文
好色ゆる申るも人の
うとむしはるも
しおむしはる 白文

基、浮母乃方也白方也
ちと見るも一白文
こころおしにおはるも
ちくよしは折折
おろりしは愛のこころ

うね母のこころ
かろるも自文のこころ
すねたる人おしはるも
けあしはるも
中書

あしくそふれなりては
あけりちむしとて
けしきれせん人こころ
中君信承兄弟なること
びりり
がふのきうびりごと
降魔相也不動尊は
のやうに念怒の相は
あしくしとて
ちと人のけいこうと

ちとちとてなりとて
なりとて
つれものも 帝隆女
西へみる 母北方より
よろしく旅のしとて
むかひ乃おしする程に
ちにとりて帝隆の腹に
る也
このちとてゆきとて
乳母のつれもなりとて

はさくして妹とさうつり
夫婦のいさゝか何れも
乃おこりいせぬ乃をよ
おこりいせぬ乃をよ

はさくして妹とさうつり
夫婦のいさゝか何れも
乃おこりいせぬ乃をよ
おこりいせぬ乃をよ
おこりいせぬ乃をよ
おこりいせぬ乃をよ
おこりいせぬ乃をよ
おこりいせぬ乃をよ

おこりいせぬ乃をよ

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

かくもあらうなりと

人れおとろくけの幸

あれども

うけしるま

うけしる鞍乃若也

私唐鞍のうけしるあり

あひしる人、供なり

しる也

うけしるましく申也

浮舟の方へ人をもつは

繪也

いふら品ららるるも

御しるし中君乃使

しるり也

らるましくしる

うけしるまはさる(んまをい

と申也のあはしるまをい

ひ自ましあひしるまを

のいおまをいしる申也

しる中し

かへりてはしるすまゝに
人々の性もさうり 白ま
はぬうちから人の害を
まもるもさるゆゑに
むしよふ事候も。物も
ありある物也
この山、こゝに 蓋はあ
りぬもさうりしるす
らぬもさるゆゑに
しるすまゝに

かへりてはしるすまゝに
うらみよの性候はし
るすまゝに 申すも
さるゆゑに
しるすまゝに
あつあるおほ
申すは 我身は是ら
事もさるゆゑに
さるゆゑに 申す
まゝに

事なるもあつてなり

これらのお存也申君は

こよしおんまゝと申事あ

らざるもあつてなり也

身にあはれやうの始り

發熱の始り也

おんまゝと申事

は性も人にもあは

らざるもあつてなり

おんまゝと申事

右述する事より調子

おんまゝと申事

申君也

おんまゝと申事

は性も人にもあは

らざるもあつてなり

おんまゝと申事

大君乃志也

おんまゝと申事

浮舟の返答を教年

ききまの任るわの中
乃あしとていふこと
早しとていふこと

あしとていふこと

浮舟のさすもて

難とみせらるる也

ききまの任るわの中

大君の早あかき

こゝろよとていふこと

八宮に似ていふこと

あしとていふこと

大君也

いふこととていふこと

あしとていふこと

今があかきとていふこと

ききまの任るわの中

あしとていふこと

あしとていふこと

あしとていふこと

あしとていふこと

きしるも 申君

いさしは竹くんかくちる
いさしは梳乃性た也梳
疑とくゆとつとく疑
公もゆしとよく
ちと疑心ちるゆし
ろわとくいさしあ
ふもさるゆし
いさしはゆし
と疑心乃あるゆし

ようのあま

常陸のあま

いとさしあま

申君の詞也

きしるもいさしあま
いさしはゆし
いさしはゆし
いさしはゆし
いさしはゆし
いさしはゆし
いさしはゆし
いさしはゆし
いさしはゆし
いさしはゆし

びつとらよきしあが
つとけ中君よんを
くもさるるにんを
あつとあつていん
らつとあつていん
お方のいんを
よむにんをいん
もいん

おつとら 母あつていん
もいん

中君よ、嫉妬乃んを
いんをいんをいん
あつと母あつていん
おつとら 母あつていん
ほつとら 母あつていん
いんをいんをいん
もいん

かつとら 母あつていん

母あつていん

さつとら 母あつていん

白文はしるすもあはれ

そり

ふりてはしるすもあはれ

いふもあはれ

ぬを也

いふもあはれ 中書

詞はしるすもあはれ

いふもあはれ

いふもあはれ

白文はしるすもあはれ

いふもあはれ

いふもあはれ

いふもあはれ

いふもあはれ

いふもあはれ

いふもあはれ

いふもあはれ

いふもあはれ

いふもあはれ

いふもあはれ

うねすちばつなをい
そつこおちうんせ

は母君中君の母方つ

はきりれも中君ともを

まの(お)あま(お)入(所)

とつり也

大うううう

向むら(お)い(し)

ら(お)ま(お)よ(う)ら(お)ま(お)い(お)え

ふ(し)ん(也)

ち(お)い(お)家 母(お)方(の)家

云(お)糸(お)と(お)ち(お)あ(お)つ(也)

こ(お)西(お)身(お)ひ(お)つ(と)う(お)家

の(お)身(お)ひ(お)つ(と)う(お)家

と(也)

ち(お)つ(と)ち(お)ら(に) 我(お)身

と(お)つ(と)は(お)俗(お)性(と)と(お)う

と(お)つ(と)す(と)く(お)け(お)つ(と)也

こ(お)ろ(お)お(お)ゆ(お)ら(に)お(お)う(と)

叔(お)八(お)太(お)の(お)子(お)と(お)る(也)

身随は我師ある方へ
あつしうせ

うけいふも 常陸の家

まじくしていひ

ももくくつた

節をうして

はくあく

ういん

流も母と名別

じい

あはまたあ

半作ある

はくあ物

つね

まうら 女お

水方、常陸外とも

ん

あ

いん

はくあ

さくらへはあつたての
ていふくまねのうら
そふ也

ふれおるうら 寂れ
二条院うら 少将の直長
まうしちかえりてす
ふ也

こねしうらうら 少将の
わらうらうら 也
うらうらうらうら 也

うらお梅はこころ也
園 紅乃うらうら也

うらうらうらうら
うらうらうらうら
うらうらうらうら
うらうらうらうら
うら也

うらうらうらうら
うらうらうらうら

してあはれい今はな
母はあつらへあやう
ふと事と

幾云り一文字は事

一物とあるは但諸本

二ノ諸本めはたの了

見の命はこゝろと

とるつらふん 浮舟の

心也しく念法さるる

不運なる神身と号也

ひこつらふらう

浮舟の舟也こゝろ

一向よう記を乃外と

うはうれしんと也

世中にあぬおしえ

年ありうさか

れさあけよつひ

予乃調つふおさ

あら也

うらふらふらう

あはれなる心にて
しるすにたゞしき
母をしのぶ心
あはれなる心
あはれなる心
あはれなる心
あはれなる心
あはれなる心

あはれなる心にて
あはれなる心
あはれなる心
あはれなる心
あはれなる心
あはれなる心
あはれなる心
あはれなる心

あはれなる心にて
あはれなる心
あはれなる心
あはれなる心
あはれなる心
あはれなる心
あはれなる心
あはれなる心

あはれなる心にて
あはれなる心
あはれなる心
あはれなる心
あはれなる心
あはれなる心
あはれなる心
あはれなる心

あはれなる心にて
あはれなる心
あはれなる心
あはれなる心
あはれなる心
あはれなる心
あはれなる心
あはれなる心

うこにもさしり

宇治の系らつくとも

とこさしり

さしりたるかきこしり

これも蕙の朝也が母

乃唯その居あよせり

こきれよと也

ふりつりて 弁も出

系あるましりとも也

れりともとも 弁の朝

作いつりて 出系は

叶つとも也

あたこのひりとも

愛者聖者空也上人事

歎彼山縁起曰空也上人

於清水寺發誓願曰念

佛行何亦りての蕙

れ出をよつりともりお徳

乃吾地しるんとも祈念

とつりとも観音告所

よく愛宕山月輪と
は是補院為山月淨土
也魔界断跡可衆
歎向之亦也於彼而此
行証了始之中有夢想
仍彼山より一多年練
行其後お洛中念仏行
を弘通し諸人を度せ
らるる事

柿本乃純信正真海

あると山よりお打寄る
入十二山山に出ると
此ら唯唯乃帝地のみ
昔行をす所今門信守
十禪師に補をうると此
事証するもわいつ好ま
るとあると一又故る事
もんしらく禁是れ人
と利生はよまると出
ありしふちるん

今もいふよめはあは
薫りしとくもあは
人のぬしとくもあは
むしとくもあは
完生は海を
事しとくもあは
人といふとくもあは
却る事とくもあは
事とくもあは
うたふとの海もあは

お尋玉絵入也

あはさくあはさく
薫りしとくもあは
さくはあはさくもあは
さくも薫りあはさく
あはさくあはさく
あはさくあはさく
あはさくあはさく
あはさくあはさく
あはさくあはさく

つー蕙のふもねは
と也

いさき先 伊暖おさ
と也 蕙にあら也さ
先ハ瓶ノ名ミ 諸好ミ
乃らハ媒ト云也媒の
物ト云ふヲ瓶乃人ヲ
と云ふト云フコト也
枿の敷ト弁トモ人の
いしる也と也

中ハはわとる人女也

蕙のんはしん可也
端ト云つとも山と命
ニ富即ハハハある
つとあるもはん也
乃のハ一帯陸女也
うあよあしんを所を始

女二宮也

いさき先 女二宮也
辨何するもいある也

わづらなれども宮に御
事あることと兼能くも
よむ敬しつちくは
まればおとめも
きくおとめも
口裏にうらみのおも
ひありつちくはに
事はおほひありつち
きくおとめも
いふ御も

いさつとつちくは
宮に御
事あることと兼能くも
よむ敬しつちくは
まればおとめも
きくおとめも
口裏にうらみのおも
ひありつちくはに
事はおほひありつち
きくおとめも
いふ御も

早天よりしらへしは
ぬつり

まじりものとも 西店也

中治のあつらひの記業

北西店のおとも也

つらひのつらひ

つらひのつらひに出系は

つくろはれしつらひ也

人せしつらひ 之を記業

あさゆ也

まじりものともいふ也

痛まよありし也

あわしつらひ

つらひあはれ也

お店ともいふ人の

八宮のあつらひ人

并びあつらひむら

しつらひ也

かあつらひも 中君也

まじりつらひ

美おちうきいぬいひ
まつりくも

兼ちうきいぬ

夜あさり

わがうきいぬいひ

家もあさり

あさり

あさり

あさり

あさり

あさり

山里いぬいひ

あさり

あさり

あさり

あさり

あさり

あさり

あさり

あさり

わうわらん

あつちよもれおらぬ

中 諸州乃既云いまの道は

車の中より入りては

車乃中より入りては

さうわ然とも蓋をたけ

いあをとりし車よりおち

ぬ君とてしひささうへ

車はさきへに引入て

よーいさぬれと車は

まらぬしうと見え

えゆれい思意うて見

しゆりよ乃詞の旅

乃やうりいさつぬり

屋のまもいふを記し

すうりありあうは

遠いきく遠の宿のふ

りそそあうあは

らふよつ宿しうと遠

れあうぬいさんき

きくしちるまは
ふくふくふくふく
夜行せし人まの部
めれもふくふくふく
九月トカツキもあつりふく
嫁娶しし正五九月を
ふく

あふくふくふく
九月節也

ふくふく入 中書の出書始

て舟后出系てふい
らぬ事ないうふく
むく

あふくふくふく
結ぶし中書くもさる

ふく
字法也

ふくふくふくの 信使も
君とあつりふく

ほくはくし 信長は
貞信公連立し如く
為意を至る貞信公の
御檀越の如くは信房
乃右をとりて信長と
はいつく
まゝに 信長也
うもはくを地ちうと
不 車中より物とて
旅日東すもあは

男女あるのち海の中に
物と引つて引く也本
丁はつらつらわら
おちるくーこれと
あつるまゝに 細長を
引つて引く也
弄 意と浮舟とも同方
同云男女同車の時定
はく作法と又折あ
細長とつて引く也

るんつ谷男女同車に
は或お見えなものは
乃簾にみるよすり
車に申よ几帳のた
し〜〜〜も
細長な〜〜〜
まわ
こし〜〜〜
た〜〜〜
ま〜〜〜

ま〜〜〜
西袖に〜〜〜
直衣よおの衣よ
ま〜〜〜車より
お〜〜〜

お〜〜〜の花の
花田に直衣ようれ
乃はおの衣よ何者
ま〜〜〜
ま〜〜〜

ねとけいしんふりしきて
あつおとしつるもつら
もふもふ又いひれおふ
上へのわつたはるは東に
前乃方ありて袖乃
東より外へさうしる
と羞みのうけぬるも
かふにせよみらふつけし
故姫君のこころもは
ふも河音と袖のめし

きらにつけしんもあ
らと補しぬるも
是とあやね前表也九
月もあうけるもいひ
楚王基よとらひ居る
日車ぬる道より
さらお表とも也
いふにほるも
居るの羞も大君も
出ぬるもよふも

とほ也

とねずりいと 弁は后

の鼻とすくもつ新煮

しうにね也うに毎の

らるまゆんと朝は

強也

いよくもつていよ

大君よ何れ也

れがまらぬもつた

あつうたぬもつた

いふゆいばのいふ

いふゆいばのいふ

いふゆいばのいふ

いふゆいばのいふ

いふゆいばのいふ

いふゆいばのいふ

いふゆいばのいふ

あつうたぬもつた

大君の亡魂もつた

あつうたぬもつた

おりにてすこ

下車にたに浮かすも

こしうすわする物も

らんをくしと一物也

あはるるにこしうすに

屋敷にははすこを俾

せしむる也

あはるるにこしうすに

らんをくしと一物也

あはるるにこしうすに

あはるるにこしうすに

あはるるにこしうすに

あはるるにこしうすに

あはるるにこしうすに

あはるるにこしうすに

あはるるにこしうすに

あはるるにこしうすに

あはるるにこしうすに

あはるるにこしうすに

あはるるにこしうすに

つらもてらるゝ ぬるん
とのぬこ

ふれおはるゝいよめこ

和琴今もぬこよに近君
也和琴いわゆるよこ
つらもてらるゝいよめこ
とまもよこよこよこ東
よこよこつらもてらるゝ
いよめこよこよこ和琴
いよめこよこ也

いよめこよこ 以近君

あゝいよめこ也

楚王乃いよめこ也

楚女園中秋扇色

楚王基上夜琴聲頃

つらもてらるゝいよめこ

常陰女のあゝいよめこ

いよめこあゝいよめこ

上れ調よこよこよこ

いよめこよこよこ

トシニシテリ 班女
秋の扇にほよすそれ
くちまふとさう先は
可禁忌申候は候
うれふとさうぬい
つよとさうとさ
とさうとあれ 名吉と
と痛しとさうとさ
お知す也
ちとさうとさ

くちまふとさうと
細と弁后の争と
さう也
くちまふとさうと
さうとさうと
わさうとさうと
さうとさうと
乃とありと
いさうとさうと

とそむいふかたも
はとのちも昔ちかきに
ふれもいひとひ
里れ者も字法をひ
しと字毎とみる月
ひおとさうとさると
ひり
はるけつとそむ

例乃作者はまは
ふらふらやうにひ

ちり

